

このコーナーはエムトラをご利用のお客さまや、エムトラスタッフ(や、そのペット)から寄せられた世界の話を皆様で紹介するコーナーです。貴重な体験をお持ちの方はどうぞエムトラへ。

なかむらくんの  
スリランカ旅行記⑥

前回までのあらすじ：エムトラベル・正木さんおすすめのスリランカへ旅立った中村君。言葉や文化、自然に圧倒されたり、現地の人にボラれそうになりながらも、正木さんからもらった3つのアドバイス(※1話参照)を胸に、たくましく散歩(=旅)を続け、旅の最後に思う事は…。

大自然の力に全てをゆだねて-屋久島の休日-  
屋久島3日間 ¥59,300~ (4名1室利用/おひとり様)

言わずと知れた日本が誇る世界自然遺産。「もののけ姫」の舞台としても有名です。独特の景観は日本にいるという感覚を忘れさせる、正にパワースポット！たとえ雨が降ろうが風が強かろうが、それが自然…と、ここではありのままに全てを受け入れるしかありません。静かにたたずんで自然と一体になるもよし、トレッキングやカヤックなどアクティブに自然と対話するもよし。是非この夏、「洋上のアルプス」へ「越境」してみましよう。(4・5日コース、鹿児島や指宿に滞在できるコースもあります。)

1日目  
小松空港→羽田空港→鹿児島空港  
鹿児島本港南埠頭→屋久島(宮之浦港または安房港)

2日目  
終日自由行動

3日目  
宮之浦港または安房港→鹿児島本港南埠頭  
鹿児島空港→羽田空港→小松空港

\*出発日：2008年10月31日まで毎日  
\*利用航空会社：ANA \*利用フェリー：トッピー  
\*利用予定ホテル：シーサイドホテル屋久島  
\*食事条件：朝2回、夕2回  
\*最少催行人員：1名(但し1名でお申し込みの場合、1人部屋利用追加料金が必要です)  
\*企画・実施：ANAセールス局  
\*旅行代金に含まれるもの：個人包括旅行割引運賃適用の往復航空運賃、羽田空港施設使用料、規定の宿泊費・食事代、トッピー乗船代(鹿児島-屋久島間)  
\*鹿児島空港から鹿児島本港までの移動は各自負担(オプションで送迎タクシーあり)  
\*出発の10日前まで受付可

名犬モモ一匹旅「クラーチエ編」

※この物語はフィクションです。

拝啓、日本の皆様。モモは今、カンボジアのクラーチエにいます。クラーチエはメコン川に住む川イルカが見られることで有名な土地。モモもイルカさんご対面…と、その前に、腹ごしらえしなきゃね。宿の近くのマーケットへ行くと、移動式パン屋さんに遭遇！まっ！何て懐かしいの…！モモのご主人さまが小さい頃は、家の近くにもよく来ていたっけ…。

売子子の素敵なお姉さんから買ったクリームパンをほおぼりながら、ノスタルジーに浸り、目的の川イルカのことなどすっかり忘れてしまったモモなのでした…。



僕にとって、旅での日々と同等に忘れる事ができないのが物乞いをする人達の存在だ。

物乞いをする事情はそれぞれ異なると思うけど、いつから着続けているのかわからないボロボロの布(服)を身にまとい、照りつける太陽の下、焼け石のような地面の上を右往左往して座り込んだり、がりがりなお母さんががりがりな赤ちゃんにオッパイをあげながら…など様々な事情とスタイルで必死で物乞いをしていた。ある寺院では何もあげなかった俺に対して腐ったジャガイモや石を投げつけてくる子供達もいた。損傷した身体の一部を見せ物にして物乞いをする人達の姿も衝撃的だった。肘から先が空気しか入っていないようなブラブラ状態の人、病気で足がパンパンにはれ、その皮膚からは虫がうじゃうじゃわいている人、何らかの理由で手や足が無い人もいた。

こういう話を聞いた。ある貧困な家庭では親が自分の赤ちゃんの手や足を切断してその赤ちゃんを見せ物にし物乞いをするという。本当に考えられないことだ。こういった人達がいた所で、時には電車にまで乗って不自由な身体を引きずり各車両を転々とし、凝視できないくらいに損傷した身体の一部を見せながら物乞いする姿は今もずっと脳裏に焼きついている。

自分が抱えている悩みは辛いものとしてとらえるのではなく、「悩めること自体幸せなことなんだ。」と痛感させられた。

こういった忘れない日々を過ごせたことを本当に幸せに感じる。たくさんの人、環境、出来事などに出会い、肌で感じ、「自分は生かされている。全てに感謝する気持ちを忘れてはいけない。」とシンプルにそう思った。貧も富も良いも悪いも自分なりに肌で感じてきたわけだけど、旅を通じて見たスリランカという国は、生きることへのひたむきさにかけては半端じゃなかった。「自分の人生を元気に真剣に生きる。」ということを思い出させてくれた。本当全てに感謝！これからももっともっと元気に生け行けだぜー！ <完>

君は走るのがそんなにまで  
Let's challenge Marathon all over the world!

1月  
ドバイマラソン(アラブ首長国連邦)  
賞金総額が約100万ドル!?多数の「世界一」で知られるドバイはマラソンもケタ違い。風光明媚なアラビア湾の景観を見ながら近代的建物の間を駆け巡る。受ける陽の光、頬をなでる風。何もかもが贅沢。翌日の疲れは高級スパで…。ここでは誰もがリッチな夢を見ることができる。

4月  
死海ウルトラマラソン(ヨルダン)  
標高差1300mのダウンヒルコースを一気に駆け下りると、そこに広がるのは神秘的な死海の眺望。走った後は死海で浮かんでくるのも忘れず。

7月  
ゴールドコーストマラソン(オーストラリア)  
眩しいビーチリゾートに設けられるフラットなコースは、ビギナーでも快走間違いなし。この時期の南半球はマラソンに最適。有名マラソンランナーと並走も夢じゃない!日焼け止め対策は「slip・slop・slap」※が合言葉※「Slip on a shirt」「Slop on a sunscreen」「Slap on a cap」

9月  
メドックマラソン(フランス)  
もはやマラソンの域を超えている。給水は高級ワイン。生演奏あり、生ガキやステーキの試食ありの飲み放題レース。ランナーは思い思いに仮装して参加する、正に世界最長のマスカレード。優勝者にはワイン60本進呈。(完走賞も当然ワイン)

※日程は変わる場合もあります。

おかもとちあきのHPはこちら→<http://giggle.hacca.jp/>

カルチャーショック!!

M-Tra★Produce

私が行きたい海外旅行<スリランカ編>  
“光り輝く島・スリランカ”。ある旅人曰く「遊園地みたいにキラキラ輝いた所だった」とか…。エムトラスタッフもハマった、スリランカの旅のほんの一部をご紹介します。詳細はエムトラにてご相談ください。

Day 1+ 日本発→コロンボ(夜着)へ(直行便もあります)到着後、1泊目のリゾートが待つニゴンボへ移動します。【ニゴンボ泊】

Day 2 専用車でゴールドンビーチの海岸線をドライブしましょう。世界遺産都市ゴールにはスリランカで最初のアマゾンリゾートが。他の隠れ家リゾートも個性的です。【ゴール泊】

Day 3 エムトラスタッフはジェフリー・パワの“遺産”とも言える「ライトハウス」に泊まりました。時間が許す限り、テーブル窓からインド洋や市内を悠然と眺めて過ごすのもリゾートならではの。アウトドア派は市街を散策してもよし、トクトクでちょっと遠乗りもよし。次のリゾート・ベントタでは、やっぱりポートクルージングを。【ベントタ泊】

Day 4 今日リゾートで1日たっぷりアーユルヴェーダDay。体に沁み入るオイルの温もり、ハーブ風呂の芳しい香り、ハードなマッサージの後に訪れるのは恍惚の境地…これこそ究極のカタルシスです! 【ベントタ泊】

Day 5 本格的なものは最低3日~1週間必要。余裕があれば是非受けてみたい!! 気楽なアートギャラリーさながらの雑貨屋が軒を連ねるコロンボでゆっくりショッピング。インド洋の風に別れを告げ、空港へ向かいます。夜コロンボ発 帰国の途へ(翌朝 日本着)

明日から  
すぐに使える! 世界の trivia

- フランスではモヤシが高級食材。 □欧米ではあだ名が姓に定着される例が多い。(例：キャメロン=鼻が曲がってる人、ケネディー=醜い頭の人…が元々の意味)
- ノルウェーの運河沿いのマクドナルドでは、ボートに乗ったまま購入できる「ボート・スルー」がある。 □カナダで柿ピーが大人気。
- ギリシャでは「NO」を表すとき、肩を上げて頭を軽く後ろにそらす。

夏のインドは暑い…だけじゃない!  
この時期しか会えないCOOLなインドを訪ねて「ラダック地方」

ここは月面都市? 超絶的なヒマラヤに囲まれた荒涼とした大地。インドでありながら荘厳なチベット仏教の伝統を維持した異境。外国人に開放されて、まだ30余年しか経っていない。秘境の言葉がこれほど相応しい地がまだ存在した。

ラダック唯一の“都会”レー。町といえども、そこは混沌とした田舎町。やけにカラフルな包装の商品が雑然と並ぶ食品店、路傍であやしい薬草を売る老女、道の真中を悠々と闊歩する牛…。全体的にモノトーンな世界だが、町の方は人々の暮らしに彩られている。面白いくらいに明確なコントラストだ。日本人の日常はどこにもない。だが、巡るうちに不思議と郷愁さえも感じられる。読者のユニゾンが聞こえてくる仏教寺院の風景があれば、ヨーロッパの古城を思わせる寺院もあり。町なかのビルマレストランのすぐ横にはインド映画のポスターが貼られ、ラダックの民族衣装に身を包んだ人がインド系の人とすれ違う。何とも国籍不明のカルチャーミックス地帯だ。

1年の半分以上は冬(-20℃以下は当たり前)で、全てが閉ざされる。短い夏季はここに入城できる貴重な時期。インドを極めたいなら(勿論そうでなくても)一度は降りた立たなくてはなるまい。近年、徐々にテレビやインターネットも普及し、近代化の波はここにも押し寄せようとしている。本来のラダックを見たいなら、今!